

『信仰に踏みとどまって』

コロサイ人への手紙1章23節

はじめに

伝統ある御教団の『宮島聖会』にお招きいただき、こうして夏の終わりの二日間、ご一緒に主の御言葉に聴き、養われる貴重な時を与えられまして、心より光栄に思い、主と皆さまに感謝申し上げます。今回の聖会ではコロサイの信徒への手紙3章1節、「上にあるものを求めなさい」が主題として掲げられています。この御言葉を心に留めつつ、三回の聖会を通してコロサイ書全体にも目を配りつつ、主の御心を教えられ、受け取ってまいりたいと思います。お集いの愛する皆さまに、主の豊かな祝福がありますように。

1. 「あなたがたのため」の祈り

「コロサイの信徒への手紙」は、使徒パウロがいまだ訪れたことのない小アジアの一教会にあてて書き送られた手紙です。1節、2節。「神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロと兄弟テモテから、コロサイにいる聖なる者たち、キリストに結ばれている忠実な兄弟たちへ。わたしたちの父である神からの恵みと平和が、あなたがたにあるように」。こうしてパウロはいつものように、まず差出人の名前、宛先、そして挨拶の言葉によってこの手紙を書き始めますが、挨拶が終わるやいなや、彼のうちからは祈りの言葉が溢れ出ます。3節。「わたしたちは、いつもあなたがたのために祈り、わたしたちの主イエス・キリストの父である神に感謝しています」。こう言われるように、このあと4節から8節まで「感謝の祈り」、9節から12節までは「願いの祈り」が捧げられていきます。

まず「感謝の祈り」では4節で「あなたがたがキリスト・イエスにおいて持っている信仰と、すべての聖なる者たちに対して抱いている愛」が賞賛され、5節で「信仰」と「愛」は「あなたがたのために天に蓄えられている希望に基づくもの」と言われます。この「天に蓄えられている希望」が、今回の主題である3章1節の「上にあるものを求める」、3章2節の「上にあるものに心を留める」につながるものです。そして1章5節で「あなたがたは既にこの希望を、福音という真理の言葉を通して聞きました」とあるように、コロサイの信徒たちはこの希望を御言葉を通して聞いたのでした。神の御言葉が私たちに与えるもの、それが希望です。私たちが抱く憧れ、願望、幻でなく、神の御言葉が私たちの希望の確かさの根拠なのです。この希望とは主イエス・キリストによって贖われた者に約束されている天の祝福、永遠のいのちの希望です。1章26節、27節でこう語られる通りです。「世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画が、今や、神の聖なる者たちに明らかにされたのです。この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。この計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です」。

栄光の希望なるキリストが、いまや私たちの内にいてくださる。これこそが私たちの信仰の現実です。そして6節で「あなたがたにまで伝えられたこの福音は、世界中至るところでそうであるように、あなたがたのところでも、神の恵みを聞いて真に悟った日から、実を結んで成長しています」と言われるように、私たちがこの福音の真理のこばを聞き、理解し、悟った時から、私たちは地上のものから解き放たれ、まことの福音の自由と喜びの中に生きる者とされたのです。

次に、これらの感謝に基づいてパウロが祈り求める「願いの祈り」についても見ておきましょう。9節から12節。「こういうわけで、そのことを聞いたときから、わたしたちは、絶えずあなたがたのために祈り、願っています。どうか、霊によるあらゆる知恵と理解によって、神の御心を十分悟り、すべての点で主に喜ばれるように

主に従って歩み、あらゆる善い業を行って実を結び、神をますます深く知るように、そして、神の栄光の力に従い、あらゆる力によって強められ、どんなことも根気強く耐え忍ぶように。喜びをもって、光の中にある聖なる者たちの相続分に、あなたがたがあずかれるようにしてくださった御父に感謝するように。

ここでパウロが願い求めていることは、コロサイの信徒たちが神の御心を十分に悟り、神をますます深く知るようになること、それをもって主に従って歩み、あらゆる善い業を行い、根気強く耐え忍ぶようになることでした。ここには「信じること」と「生きること」の深く結びついた姿があります。私たちがどのように福音を信じているかが私たちがどのように福音に生きるかを決めるのであって、信仰のリアリティーは福音理解にかかっているといつてよいでしょう。私たちはどのように信仰をリアルに受け取っているのでしょうか。信じる事が生きることと切り替えられない価値観になっているのでしょうか。地上のもとに支配された価値観か、それとも上にあるものを求める価値観でしょうか。信仰と現実を使い分ける二つの基準だろうか。この問いと誠実に向き合っていきたいと思うのです。

2. イエス・キリストを知る

パウロのコロサイ教会に対する願いは「神をますます深く知る」ことでした。では目に見ることのできない神をどのように知るのか。それは見えない神の御姿なる神の御子イエス・キリストを知ることによるというのです。続く13節から22節は大変洗練された言葉遣いで記され、賛美歌のようにして歌われたり、信仰告白の言葉のように唱えられたりした「コロサイ書のキリスト論」とも言うべきところです。まず13節から17節で創造のはじめから存在された御子の神性が強調され、18節から22節ではこの御子が教会の頭であること、また御子が成し遂げてくださった十字架による贖いの御業が教えられています。このように、私たちの主イエス・キリストは万物の創造の前からおられた神の御子、そして万物の頭、世界の主であり、そして教会の頭です。そのようなお方が、私たちの罪の贖いのために十字架にかかり死んでくださり、よみがえってくださった。私たちはこのお方をどのように知るのか。イエス・キリストを知る、その知り方に心を向けたいと思います。

私たちが知り、信じているキリストは十字架のキリストである。この認識は決して洗練され垢抜けた知的な知り方ではありません。キリストを恥とする思いの中では知り得ない認識であり、神をあがめる目的でなければ知ることはできない認識です。そこでは人々には愚か、躓きでしかない十字架と復活の主イエス・キリストを救い主と呼び、我が主と呼ぶ信仰の決断、覚悟が必要なのです。そのために23節。「ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません」。垢抜けた知的で洗練された思想、高邁な哲学、魅力的な世界観、手頃で御利益的な考えは数多くあります。しかし私たちは思想や思弁のために生きているのではない。十字架につけられたキリストの命というこの上ないリアルなものに突き動かされて生きている。その現実をこそ私たちの最高の価値基準として歩んでいきたいと思います。

3. キリストに仕える務め

最後に、コロサイの信徒たちがこのように御子イエス・キリストを通して神を知り、神を愛し、神にあって生きる者となるために、福音に仕える者として召されたパウロの使命と労苦があったことも忘れずにおきたいと思います。パウロは言います。24節。「今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています」。さらにパウロは2章1節、2節でもこう言います。「わたしが、あなたがたとラオディキアにいる人々のために、また、わたしとまだ直接顔を合わせたことのないすべての人のために、どれほど労苦して闘っているか、分かってほしい。それは、この人々が心を励まされ、愛によって結び合わされ、理解力を豊かに与えられ、神の秘められた計画であるキリストを悟るようになるためです」。自らキリストを知り、キリストに結ばれて生きる者とされた者は、今度は

隣人にキリストを知らしめ、キリストに結ばれて生きる者とせしめるための務めを担うのです。

私たちは今回の学びを通してキリストに結ばれて生きることのリアリティーについて考えようとしているのですが、そのようなリアルな信仰を私たちはどこで獲得するのか。それは「キリストの体なる教会において」ということなのです。その意味でも、いつも自分自身が「教会に生きる」というリアリティーを失わずにいたいと思うのです。私自身は信仰の営みというのはきわめて実践的なものであると思っています。特に私自身はキリストに仕えるということを忘れないために、いつもこのことを日常の中で繰り返し確認し続けています。体で覚え、繰り返していかなければ、私たちの感覚はすぐに抽象の世界に逃げ込んでいってしまいやすいのです。教会に仕える。これほどリアルな現実はありません。

そこで私たちはパウロの言う「キリストの体の欠けたところを満たす」というほどの経験をしているでしょうか。あまりにも中途半端で、ほどほどで、無理をせず、涙も汗も流れない、そんな無難な教会生活を送っていないでしょうか。しかしパウロは言います。Ⅰ章29節。「このために、わたしは労苦しており、わたしの内に力強く働く、キリストの力によって闘っています」。新改訳聖書では「労苦しながら奮闘している」となっています。パウロのひたむきな姿が浮かんでくる御言葉です。それでもその労苦は悲壮感漂うものではない。なぜならキリストのために味わう労苦のただ中で、そのパウロを支えているのは「自分のうちに力強く働くキリストの力によって」というのです。キリストに仕えることは教会に仕えることを通してしか分からないし、キリストのために労苦することがなければ、キリストの力を本当の意味で味わうことはできないのです。信仰に踏みとどまり、キリストの力にあずかる時、私たちはそこで信仰者としてのアイデンティティーを獲得するのであり、そこから「上にあるものを求めて」生きる足場が固く据えられるのです。